

ミフタクル・アムリ学位申請論文内容要旨

論文提出者名 MIFTACHUL AMRI

論文題名 インドネシア語・日本語ビジネス電子メールについて―「敬称」「前文」「主文」「末文」の研究―

(1) 論文の構成

本論文は、本文、注、参考文献を含め、125 頁からなり、巻末に Excel で整理した「インドネシア語と日本語ビジネス電子メール一覧」をデータとして付している。本論文の構成は、以下の通りである。

序章 本研究の目的

第一章 インドネシア語・日本語ビジネス電子メールにおける「敬称」の使用状況

『イ・日メールの「敬称」の使用数と使用率』一覧

『イ・日メールの「宛名における敬称の用法」と「本文の敬称の用法』一覧

第二章 インドネシア語・日本語ビジネス電子メールにおける「前文」の出だし表現

『イ・日メールの「前文」出だし表現の結果』一覧

第三章 インドネシア語・日本語ビジネス電子メールにおける「主文」の前置き表現

『インドネシア語メールの「主文」の結果』一覧

『日本語メールの「主文」の前置き表現の結果』一覧

第四章 インドネシア語・日本語ビジネス電子メールにおける「末文」の締め括り表現

『イ・日メールの「末文」の締め括り表現の結果』一覧

終章 結語

参考文献一覧

資料：インドネシア語・日本語ビジネス電子メールのデータ一覧

(2) 論文の内容要旨

本論文のメールデータは、2009 年から 2014 年にかけて発信されたもので、インドネシアのジャワ島における日系企業で仕事をする人達のメールである。協力者はインドネシア人 8 名。インドネシア人が書いたインドネシア語によるビジネスメール 300 通と日本人が書いた日本語によるビジネスメール 300 通、合わせて 600 通のパソコンメールである。ただし、300 通のインドネシア語のメールの内、4 通（メール番号 71・72・73・266 号）のメールはインドネシア人が日本人にインドネシア語で送ったもの、1 通（メール番号 300 号）は日本人がインドネシア人にインドネシア語で送ったものである。本論文は、その中でも特に「敬称」「前文」「主文」「末文」の考察を中心に行っている。

日本語の「敬称」では「～様/～さま/～殿」の使い方について、インドネシア語の「敬称」

では「～Bapak（目上の男性へ）/～Ibu（目上の女性へ）/～Mbak（若い女性へ）/～Mas（若い男性へ）」の使い方について分析した。「前文」については、日本語とインドネシア語の「前文」の使用率と出だし表現の種類について明らかにした。「主文」については「オサシツカエナケレバ」「タイヘン（デショウガ）」「カッテ（デスガ）」という前置き表現の意味と用法を明確にした。「末文」は「よろしく願います。」の類のような締めくくりの表現について検証した。全体を通し、メールの構造を観察すると共に、各部分での表現の機能と特徴を明らかにすることを試みた。以下、各章ごとの内容を記す。

序章においては、まず、本研究の目的を示した。次に、ビジネス日本語についての予備調査の結果を報告した。国立スラバヤ大学（Unesa）の日本語学科には学生が300人以上在籍しているが、そのうちの学生154人に質問したところ、「日本語のビジネス文章の書き方」を希望する者が109名いた。本論文の考察は、このような学生達への教育面へも資するものである。

第一章においては、インドネシア語と日本語の電子メール「敬称」の使用状況と「宛名における敬称」と「本文における敬称」との比較検討を行った。インドネシア語と日本語のビジネス電子メールによる「敬称」を考察した結果、以下のような数値が得られた。インドネシア語のメールの「敬称」の使用状況は300通のうち196通あり、65%だった。日本語のメールでは204通あり、68%であった。

インドネシア語のメールの「敬称」で頻繁に見られた表現は9カテゴリーに分けられた。それらは、①「Bapak/Pak（名前）」、②「All Manager」、③「Ibu/Bu（名前）」、④「Bapak/Ibu/Saudara/Saudari」、⑤「Mbak（名前）」、⑥「Mas/Mbak」、⑦「Mr.Ms.（名前）」、⑧「Mas（名前）」、⑨「Bos（名前）」である。

日本語のメールでは7カテゴリーがあった。①「～殿」、②「～様」、③「～さん」、④「～各位」、⑤「～社長、～部長、～次長」、⑥「～San/Mr.」、⑦「～さま」である。インドネシア語のメールで一番多かった「敬称」の表現は「Bapak/Pak（名前）」（67通）、日本語のメールでは「～殿」（105通）であった。インドネシア語のメールには、日本語のメールに見られなかった「Mas（名前）」「Mbak（名前）」と「Mas/Mbak（名前）」が見られた。その「Mas」と「Mbak」の機能は、日本語の接尾語「～ちゃん」と同様である。

インドネシア語では、初対面の人や下位者に対して、「Mas（名前）」を使うことが見られる。例えば、インドネシアの会社の人事部は、内定や合格を知らせるとき、「Bapak/Pak（名前）」を使わずに、「Mas（名前）」を用いる。「Mas」単独のメールも5通あった。このような現象は日本語のメールでは見られない。一方、本調査では、日本語メールにおいて、親しい人に対して「～ちゃん」はなかった。親しい間柄でも、少なくとも「～さん」「～san/Mr.～」である。日本語では「～さん」「～san/Mr.～」を使う「敬称」は合わせて21通があった。

日本語・インドネシア語の「敬称」の用法の相違点は、次の三点にまとめられる。第一に、「敬称」の使用は日本語よりインドネシア語の方が多く、第二に、相手により「敬称」表現を変える特徴はインドネシア語のメールの方にはっきり見えること、第三に、「敬称」の使用においては、インドネシア語より日本語の方が上下関係が明確なことである。

「敬称」という観点からみると、インドネシア語では、部下に対しては呼び捨てをしたり、「Mas/Mbak」を使用することが多く見られた。親近感がある人に対しては、フォーマルな「敬称」(Bapak/Ibu)を使うより、砕けた「敬称」(Mas/Mbak)の方が好まれている。インドネシア人が親しい「敬称」を使用したり、呼び捨てをするのは、受け手を軽く見ているのではなく、親近感を示したいからである。

日本語の場合は、上下関係が明確に反映し、いくら親しくても、相手をそれなりに待遇するから、メールでは、「～ちゃん」は書けない。また、本当に親しいグループのメンバーだと、「宛名」の「敬称」で「さん」を用いることはあるが、受け手を尊重するため、頻繁にメールのやり取りをしても、「様」に固定化される傾向が一般に見られる。仕事仲間には「敬称」の使い方が崩れる場合もある。「宛名」の「敬称」は「殿/様」を使うが、「本文」では「さん」を用いるケースもある。しかし、逆パターンの、「宛名」は「さん」で「本文」では「殿/様」は1例もない。

インドネシア語・日本語の「宛名」と「本文」での「敬称」使用バリエーションの比較を述べる。インドネシア語の場合、一番多いパターンは「宛名」(Bapak) → 「本文」(Pak)である。また「宛名」「Bapak」 → 「本文」「Bapak」のパターンは、特に目上に対して使い、本調査では2番目に多い。日本語の場合は「宛名」は「殿」、「本文」でも「殿」が最多である。この点に関し、村上英紀(2012)が、宛名の「殿」は最近あまり使われず、「～様」に統一される傾向にあると述べているのは、本調査の結果と合っていない。

第二章では、「前文」の出だし表現を分析した。様々な挨拶表現の使用実態を報告し、中でも単独使用と複合使用に注目する。本章では、様々な挨拶の関わりが明らかにされ、以下のような結果が得られた。インドネシア語のメールの「前文」で頻繁に見られた出だし表現は6カテゴリーに分けられた。それらは、「一般的な挨拶」「感謝」「宗教的な挨拶」「インドネシア語の敬辞」「英語の敬辞」「複合パターン」である。日本語メールでは5カテゴリーがあった。「名乗り」「一般的な挨拶」「感謝」「労い」「複合パターン」である。

インドネシア語のメールで一番多かった出だし表現は「インドネシア語敬辞」(56通)、日本語のメールでは「労い」(36通)であった。インドネシア語のメールには、日本語のメールに見られなかった「宗教的な挨拶」と「インドネシア語・英語の敬辞」が見られた。相手により挨拶表現を変える傾向は、インドネシア語のメールの方が明瞭である。日本語のメールは上下関係にかかわらず丁寧な挨拶をするのに対し、インドネシア語のメールでは日本語式の表現は見られない。インドネシア語のメールは、目上に対しても、「Dear (人名) (敬称なし)」で、敬辞しか言わなかった例もある。さらに、ビジネス場面でも、親疎

を問わず、一般的な挨拶の代わりに、宗教的な挨拶「Assalamualaikum 〈アッサラーム アライクム〉の祈願で（無事と幸せになれますように）の類い」を使う場合もある。本来、Assalamualaikum はアラビア語で、イスラム教徒ではない人達は、インドネシア語で宗教的な挨拶を表す時には「Salam sejahtera」〈サラム スジャトゥラ〉を使う。「Salam」は挨拶で、「Sejahtera」は幸せという意味を持っている。また、挨拶を言わずに、「dh=Dengan Hormat 〈ドゥガン・ホルマツ）「Dengan」は関係代名詞 dengan（英語 :With)、「Hormat」は「尊敬」という意味で、(敬意を込めての) インドネシア語の敬辞の省略」だけのメールの出だし表現も見られた。

「Assalamualaikum」は用法の幅が広く、改まった挨拶に使用できるし、砕けた場面でも使える。基本的には、宗教の挨拶なので、イスラム無信仰の人達には、この挨拶をしても、反応がない恐れが高い。その代りに、このような聞き手に一般的な挨拶をするのは妥当である。例えば、「Selamat Pagi」(おはようございます)、「Selamat Siang」(こんにちは)、「Selamat Malam」(こんばんは)である。あるいは、意味的には類似している表現で、「Salam sejahtera」を言うのは適当である。

なお、本章では複合パターンの傾向を報告できた点が重要である。詳細は論文本文を見られたいが、ここでの知見は、直接、日本語教育に役立つものである。

第三章においては、「主文」の前置き表現が分析される。日本語のメールは 300 通のうち、「主文」に前置き表現のあるメールは 73 通あり、表現の種類としては 8 カテゴリーがある。それらは、①「お差し支えなければ」1 通、②「大変（でしょうが）」2 通、③「勝手（ですが）」2 通、④「よければ」2 通、⑤「恐縮ですが」5 通、⑥「お手数ですが」8 通、⑦「申しわけありませんが類」13 通、⑧「可能形類」40 通である。この中から、「オサシツカエナケレバ」「タイヘン（デショウガ）」「カッテ（デスガ）」の意味用法を分析した。ただ、メールデータだけでは用例数が少ないので、補足データとして BCCWJ（日本語話しことば均衡コーパス）を使った。

分析結果を述べる。

①「差支えなければ」の用法。メールでは「サシツカエナケレバ」に前接する表現はないが、後の表現はおおむね「依頼表現」である。典型的な表現は「お〜ください」である。BCCWJ の場合は「サシツカエナケレバ」の前には様々な表現や意味項目が前接し、後の表現は「依頼表現」が一番多かった。典型的な後続表現は「〜いただけますか」「〜てください」「〜いただけないでしょうか」「〜てもらえると嬉しいです」「〜てほしいです」である。

②「大変（でしょうが）」の用法。メールの場合、「大変（でしょうが）」の前接表現は「一人で」のみである。後接表現はほとんど「激励」と「依頼表現」である。この際の典型的な表現は「〜てください」である。BCCWJ の場合、「大変（でしょうが）」の前は、メールの受け取り手に心理的コストを与える様々な項目が来る。後接表現は「報告」と「激励」

が一番多かった。典型的な表現は「～はありますよ」「～は大変だと思います」「～てください」である。

③「勝手（ですが）」の用法。メールの場合は「勝手（ですが）」の前接表現は、「誠に」しかなかった。後接表現はおおむね「依頼表現」である。典型的な表現は「～していただけましたら幸いです」「～ください」である。BCCWJの場合は「勝手（ですが）」の前の表現は書き手に属する様々な意味項目ならびに表現であった。後接表現はおおむね「報告」と「依頼表現」であった。典型的な表現としては「～と思っています」「～がいっぱいありますよ」「～は失礼なことです」、「～で欲しいと思っています」「～宜しくですよ」「～お～させていただきます」「～ないように」「～をお願いします」「～よろしくお願い致します」「～よろしくお願い申し上げます」などである。

第四章では、「末文」における締めくくり表現を分析した。インドネシア語メールで、締め括り表現である「末文」を持つメールは235通、全体の78%であった。インドネシア語メールの「末文」で頻繁に見られた締め括り表現は7カテゴリーに分けられた。それらは、「感謝」「一般的な挨拶」「宗教的な挨拶」「末尾の形式」「敬辞」「依頼」「複合パターン」である。複合パターンは17種類があり、一番多かったパターンは「感謝→一般的な挨拶」である。

日本語メールでは、「末文」のあるメールは90通、30%であった。日本語メールでは、表現は6カテゴリーあった。それらは、「末尾の形式」「一般的な挨拶」「依頼」「感謝」「謝罪」「複合パターン」である。複合パターンの種類は3種類あり、一番多かったパターンは「末尾→一般的な挨拶」である。

インドネシア語メールで多く使う締め括り表現は「感謝」(84通)、日本語メールでは「末尾の形式」(37通)である。インドネシア語のメールには、日本語メールに見られなかった表現「敬辞」と「宗教的な挨拶」がある。逆に、日本語メールには、インドネシア語のメールに見られなかった「謝罪」表現があった。

日本語のメールには「末文」が3割しか見られないが、これは「末文」そのものが不要なのではなく、親しい間柄に対しては、締め括りの挨拶を書かなくてもおかしくないからだと思われる。

また、「末文」だけではなく、「前文」がない理由として、初めてのメールではない場合や、同じ相手に何度もメールをやり取りしている場合があると考えられる。また、人間関係が近いと、挨拶を省く場合もある。さらに、送信者と受信者とが、メールの内容をお互いに分かっている場合は、「前文」なしで、直接「主文」に入ることは珍しくない。

終章においては、四章まで明らかにした諸点を要約した上で、インドネシア語のメールと日本語のメールとの比較の総括を行った。

本論文では主として計量的なデータから表現分析を中心に論を進めたが、送信者・受信

者の関係性を踏まえた、質的な研究が今後の課題である。また本論文で得られた知見を、実際の日本語教育の現場で、今後どのように活かすか考えることも、今後の重要な課題である。